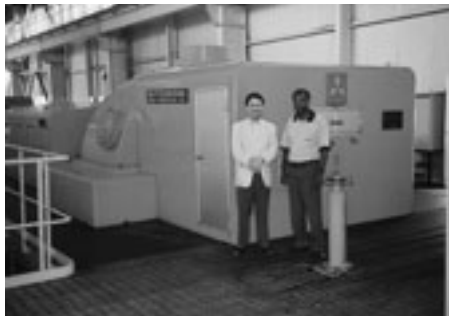


▶ケニアの地熱発電設備にて、ケニア人発電所長とともに(2000年3月)

▼ピアソン・カレッジの船着場にて(1976年5月)



エートト侵攻に遭遇し、サダム・フセインの「ゲスト」として約三カ月間のイラク国内での軟禁生活を過ごしたこの時感じたことが二つある。一つは、ピアソン時代のエジ

き、リベリアの人々と違和感なく付き合うことができた。その後、一九九〇年五月には、初めての海外駐在となる中東のクウェートに赴任した。同年八月、イラクのク

プト人とイスラエル人留学生のこと。二人とも個々に話す性格の良い高校生であったが、当時の二カ国の関係を反映してお互いに話をしないのである。私は軟禁中に監視していたイラク兵と話す機会があったが、彼らは人間として性格的に誠実・温厚である一方、国際社会がクウェートをイラク固有の領地であると認めてくれないことに強い疑問を呈していた。独裁者が情報を管理し、政策を決定する社会が、いかに国民の考え方に影響を及ぼすかを実感し、私は恐怖を感じた。

次に、ピアソンの校則は「他人のものは盗まない」等の三つしかなく、それ以外の寮生活上必要な規則は、全校生徒が集まるヴィレッジミーティングで、生徒が自主的に提起した問題を議論し、新たに決めていたことである。これは理想論的なやり方で現実的ではないと思われるかも知れないが、育った環境が全く違う全校生徒が実際に新たな規則を決めても、最終的には日本人の自分が考えても常識的な結論に達するのである。

この原稿を書いている時点では、イラクおよび北朝鮮問題が世間を騒がしており、ともに最終的にどのような決着になるのか予断を許さない状況であるが、関係各国が真摯に対話する機会をお互いにもっと持た

うとすれば、世界が望む平和的解決の可能性が高まり、誰もが理想とする国際社会に少しでも近づけるのではないかと思考する次第である。

現在の私は、三菱商事入社後、海外出張した国の数はすでに四〇カ国を越え、昨年も六カ月近く海外出張するなど多忙な商社マンの日々を過ごしている。仕事の面では、地球温暖化問題に少しでも貢献できるような発電プラントの取引を中心に行っている。ケニアでは、再生可能エネルギーを利用した地熱発電所を世界銀行のファイナンスで建設中である。中央アジアでは、地球温暖化ガスの削減に寄与するプロジェクトを日本の電力会社とともに進めている。これらのプロジェクトは、電力不足に悩む関係各国から環境改善にもつながるとして非常に喜ばれている。

こうした活動の積重ねが社会のためになることを教えてくれたのは、ピアソン・カレッジでの二年間であり、その経験を大事にして今後も過ごしたいと考えている。

最後に、奨学金と貴重な経験の場を与えてくれたUWC日本協会の会員各社および関係者の方々に心から御礼を申しあげるとともに、このような貴重な経験を今後多くの若者が受けられることを願ってやまない。

夢・悩み・そして今

——人生を考えさせてくれた

ピアソン・カレッジでの二年間——

UWCピアソン・カレッジ(カナダ、一九七五～七七年)。
七七年カールトン大学入学(オタワ)。
七八年国際基督教大学編入。
八二年同大学教養学部社会科学科卒業。
同年三菱商事入社、現在に至る。



坂本伊圭雄

さかもと いけお

三菱商事重電機輸出ユニット部長代理
欧阿・中東担当

カナダのピアソン・カレッジを卒業してからはや二五年の年月が過ぎた。しかしながら、初めてピアソンに行った時のことは、今でもついこの間のことのように思い出す。

夢と悩み——ピアソンとの出会いと教えてくれたもの

父の仕事の関係で生後三カ月から四歳までをモントリオールで、小学生五年、六年をローマで過ごした私は、日本の高校に通いながら、海外にもう一度行きたいという夢を抱いていた。その時父が、当時一般的にはあまり知られていなかったUWCのことを私に教えてくれたのは全くの偶然であった。

留学当初、自信を持っていた英語が通じ

ないことに悩み、悶々とした日々を過ごしていた私は、その問題をカナダ人ルームメイトに話した。彼から「伊圭雄はいつもニコニコと話を聞いていたので、問題があるとは思わなかった」と言われ、ジャパニーズスマイルで問題に直面しようとせず、ごまかしていた自分に気がついた。四〇を越える国々から学生が集うピアソンという小さな国際社会では、自分から主体性を持つてコミュニケーションすることが重要であると感じた。

二年間のカレッジ生活は、あつと言う間に過ぎ、カナダの大学に入学し、一年目の終わりに私は新たな疑問に悩んでいた。ピアソンの二年間を入れると、私は人生の半分を海外で過ごしたことになる、自分のア

●(社)ユニテッド・ワールド・カレッジ(UWC)日本協会は、世界各国から派遣されてくる生徒たちとの教育体験の共有により、国際感覚豊かな人材を養成するという理念を掲げるUWCの日本委員会として、毎年一〇名以上の高校二年生を世界各地にあるUWC傘下の高校に派遣し、すでに三六〇名以上の卒業生を輩出している。

イデンティティに疑問を抱いたのである。

日本人として生まれながら、日本文化を満足に語れず、日本人としての明確なアイデンティティを持たない私が、果たして他国の文化について語る資格があるのか。自分が目指していた国際人になれるのか。随分迷ったが、最終的に出した結論は、日本にもう一度戻ることだった。そして、日本人としてのアイデンティティを確立し、それをベースに世界に貢献できる仕事をしたという新たな夢を抱いた。

そして今——ピアソンでの経験を生かして

三菱商事に入社したのも、その夢の実現に向けて世界的な仕事をしたというのが理由の一つであった。そして、市民生活にとって不可欠な発電関連設備を扱う部署に配属された。

三菱商事での最初の海外出張はアフリカのリベリアであった。ここでもピアソンでアフリカからの留学生と交流した経験が生